

「歴史は創られる」ことを学ぶ古代学習

長野県飯田市立旭ヶ丘中学校 田中清一

1 はじめに ―古代史情報の可変性への着目―

地理的分野の改訂が大きな変化をともなうものであったため、どうしても私たちの関心は地理にむきがちである。しかし、学習時間と内容の削減でもっとも大きな影響をこうむったのが、実は歴史的分野だったことに、多くの先生方が気づいておられるだろう。私もそのうちの一人である。

さて、そのような状況の中で、できるだけ多くの生徒たちに歴史を学ぶ楽しさや醍醐味を味わってもらいたい。この思いは、社会科を専門とする教師に共通のものだろう。では、前述のような厳しい現実を前に、どのようなアプローチをすれば、歴史を学ぶ楽しさを生徒も教師もともに味わえるだろうか。

ここで私は、古代史および古代の学習に着目したいと考える。その理由は、以下の3点である。

- (1) 古代史においては、ある見解が依拠する史料が絶対的に少ないため、見解そのものの相対性が他の時代に比べて高い
- (2) (1)であるがゆえに、イメージーションを働かすことができる
- (3) (1)であるがゆえに、(2)を基盤にした論理的発想を鍛えることができる

つまり、古代史は他の時代に比較して史料の絶対数が少ないため、新たな史料の発見によって見解が書き換えられることが多く、「歴史は、もう起きてしまった不変な情報＝覚えなければならないことのかたまり」という、生徒に根づいた固定観念に揺さぶりをかける絶好の時代なのだ、ということである。

そこで本稿は、認知心理学者の市川伸一氏が『開かれた学びへの出発』（金子書房、1998年）の中で紹介している、Researcher-Like-Activity（RLA：研究者の縮図的活動＝「研究者のようになってみる学習」）に学びつつ、古代史の持つ特性に着目した、教材および授業（構想）について述べてみたい。

2 マネのすすめ
―イメージーションと分析力の育成―

加藤公明氏の『考える日本史授業1・2』（地歴社、1991年・1995年）に、中学生にもおすすめの授業実践が紹介されている。それは、「加曾利の犬の謎を追え」という実践である。私はこの実践をぜひ、多くの中学校の先生方にもマネしていただきたいと思う。マネというと人聞きが悪いかもしれないが、私がこの実践をマネするのは、前述した古代史に着目する3つの理由のすべてを、この実践が兼ね備えていると判断するからである。

さて、授業の実践である。千葉県に加曾利貝塚から出土した1匹の犬の完全遺体。この犬の写真を見て、気づいたことや疑問を出しあうことから授業がスタートする。もちろん、中学生に授業を行う場合は、この前に教科書や資料集などで、縄文時代・弥生時代の生活文化の違いや共通点を、小学校時代の学習を想起させながら簡単に扱っておくことが必要である。また、貝塚がいかなる場所なのか、ということについての基本的な情報にもふれておく必要がある。しかし、ここで情報の確認ばかりに比重を置いてしまってはならない。あくまでも、生徒たちに歴史学習においてイメージーションが重要な要素にもなる、ということを知りたせらるために、必要最低限の情報を「知らせる」ととどめる。

『考える日本史2』のp.13に、加曾利貝塚博物館蔵の犬の完全遺体の出土状況を撮影した写真がある。この写真を大判に拡大して黒板に掲示し、出土状況や貝塚の役割、犬以外の出土物の状況などを簡潔に伝える。生徒は、その情報および

目の前の写真から気づいたことや疑問を発言する。この時、思いつきでなかばふざけたような発言も出される。しかし、ここでこれらの発言を遮らないことがポイントである。それらの発言も黒板に板書して、クラスの仲間の意見のひとつとして位置づけてやることで、生徒たちは歴史学習においても「自由にものを考え、自分のことばで発言することが安心してできるのだ」ということを体感できるからである。

さて、この授業の展開の詳細は省くが、学習課題として位置づいてくるのは、「なぜ、他の魚・動物などはバラバラの状態で出土するのに、犬は完全遺体のまま出土するのか」、である。実は、この課題への見解は研究者の間でも分かれている。そのことも生徒たちに告げたくて、「みんなも歴史研究者になったつもりで、仮説を立て、その仮説を成り立たせるための証拠を、教科書や資料集などから探して、この謎を解決してみよう」と投げかけるのである。

生徒たちはイマジネーションを働かせ、なおかつ、縄文時代の生活文化や環境、なかには縄文人の心性にまで思いを巡らせて、様々な仮説を提示してくれるはずである。私が今までいくつかのクラスで実践した時には、次のような仮説が出され、驚かされたことがある。

「縄文人にとっては、食べ物はすごく大切で、すごく貴重で神聖なものだったと思う。だから、貝塚は食べ物のカスやうんちを捨てる場所という考えじゃなくて、貝殻も『元食べ物』、うんちも『元食べ物』ってことで、神聖なものを集めておく場所だったんだと思う。だから、猟犬として大切にしていた犬を、その神聖な貝塚に丁寧に埋めたんだと思う」(Y君)

この仮説は、加藤氏の生徒たちの仮説の中にも出てこないものである。また、この仮説の歴史学的な妥当性はわからない。しかし、Y君のこの仮説には、縄文時代に生きた人々の心にまでふみこんだ、イマジネーション豊かで、かつ分析的で論理的な見方・考え方の育ちを見ることができる。このような見方・考え方に会えるという意味でも(むろん、そこには教師の歴史学における研究動向をふまえた教材研究と指導・援助が必要ではあるが)、加藤氏の提示したこの実践をマネする

意義は大きいと考える。

また、分析的な見方・考え方を培うために、古代学習の中で効果的な教材として、奈良時代に作成された戸籍・計帳類がある。私は、授業において、なるべく「生の史料」にふれさせたいとの願いを持っている。むろん、戸籍・計帳の本物にふれることはできないが、書籍に転載されている写真を使用すれば、歴史が「史料から創られているものだ」ということの一部にふれることにはなる。

「越前国江沼郡山背郷計帳」(私は、『週刊朝日百科47』所収を使用することが多い)を、時間をかけてグループでの協働作業的に読み取らせると、奈良時代の農村や農民の姿を、生徒たちなりにつかみとることができる。「兵士」「調」「庸」といった歴史用語を読み取った生徒が、調べる必要感を持って、資料集でその意味を調べることができる。また、年齢や身体的特徴(「黒子」「残疾)」を読み取ることで、奈良時代に生きた農民の生きた姿に思いをはせることもできる。さらに、「逃」の字から奈良時代の農民の置かれていた生活実態の一端に迫ることもできる(「偽籍」を取り上げるとより多面的で豊かな奈良時代像を、生徒たちとともに描き出し、つかみとれる可能性がある)。

3 おわりに —歴史学への教師の目配り—

古代史においては、限られた史料しかないがゆえに、豊かなイマジネーションが求められる。また同時に、確かな分析力と論理性も問われる。だからこそ、生徒たちがいわゆる「正解」に拘泥せず、歴史学の持つ学問的な創造性を感得するに適しているとも言えるのである。

こういった前提に立てば、教師は常に歴史学の研究動向に目配りをする必要がある。それは、いわゆる歴史論争への目配りであり(古くは「邪馬台国論争」、「法隆寺再建論争」、大山誠一氏による一連の「聖徳太子」研究など)、また考古学的発見への目配りであろう(放射性炭素分析が明らかにした縄文農耕、出土遺骨が語る縄文時代戦争開始論、年輪測定法による建築年代の割り出しや書き換え、木簡類や漆紙文書が明らかにした古代などなど)。

つまるところ、教師がたえず学ぶことが、生徒の豊かな学びを保証する、ということなのだろう。肝に銘じていきたい。